

マルクスにおける使用価値概念の変遷

——商品学における品質論との関連で——

石 崎 悦 史

一 はじめに

本稿では、マルクスの使用価値概念の変遷を検討することをとおして、これまで経済学においては軽視され続けてきたと考えられる使用価値概念の重要性を再確認し、使用価値概念の復権を意図しようとしている。マルクスの使用価値概念の変遷を、文献的に追跡していくことだけでは、使用価値概念の形式的な整理にとどまるという限界を持つことを否定することはできない。だが、このような形式的な整理ですらも、これまで行なわれてこなかったというのが実情である。形式的な整理さえもなされてこなかったというところに、使用価値概念が経済学

において軽視されてきたということへの一つの傍証を見る思いである。

このような形式的な整理のみでは、マルクスの使用価値概念が十分に把握できるとはいえない。しかしながら、マルクス自身の使用価値理解が、初期マルクス以来、深化され、抽象化されてきているという段階を経てきたことをあきらかにする役割は果せるであろう。マルクスの使用価値概念の変遷は、形式的な発展ではなく、よりダイナミックな発展をとげているという内実の一端をかいまみるだけの材料を提供しうるのはないかと考える。このように、マルクスの使用価値概念の変遷を追跡することによって、使用価値概念をあきらかにしようとい

うことが、本稿の直接の目的である。さらに、本稿の延長線上に見通しうる目的についてもここで言及しておく。サブ・タイトルにも明らかなように、マルクスの使用価値概念が商品学の理論、特にその品質論との関係において問題となるのである。

マルクスは『経済学批判』(一八五九年刊)において、商品学に言及している⁽¹⁾。

「これこそ、ドイツの書物の切張り屋連が『財』という名称のもとに固定された使用価値をこのんで論じるのはなぜかという理由である。たとえば、L・シュタイン『国家学体系』第一巻、『財』にかんする篇を見よ。『財』にかんする知識は『商品学指針』のうちに求められなければならない。」(邦訳一四ページ)と注記している。

また、『資本論』第一巻(一八六七年刊)においても、⁽²⁾
「いろいろな商品のいろいろな使用価値は、一つの独自の学科である商品学の材料を提供する。」(邦訳四八ページ)

と書いて、商品の使用価値と商品学との関係についてふれているが、「材料を提供する」とはいかなる意味で

あろうか。両著作の意味は、商品についての知識を得ることができるといふ役割を当時の商品学が狙っていたといふことである。たしかに、これまでの商品学の実態をみても、商品についての知識を扱っていたことになる。商品の使用価値的側面を担当していたのである。その使用価値的側面の内容は商品についての知識にとどまっていた。(商学の体系のなかで商品学を体系化しようという試みはあったが⁽³⁾)。商品の使用価値についての理論的考察を欠落させてきたのである。

マルクスは『資本論』第一巻第一章における注五において

「ブルジョワ社会では、各人は商品の買い手として百科辞典的な商品知識をもっているという擬制が一般的である。」(邦訳四九ページ)

と注記している。この注記は商品学における商品知識の重要さを示すものである。商品を買う場合に、その商品についての知識をなんらかの形で手に入れないければ買うという決断の拠りどころがないからである。商品知識については自分のそれまでの体験や、店頭での説明によ

ることもあるが、印刷物をおしての商品知識の獲得という範囲も大きい。過去においては、商品知識の集積について商品学の役割が大きかったが、現在では、新聞・雑誌・書籍などに商品知識に関係する記述を求めることはきわめて容易である。社会の変化に応じて、商品学に要請される役割も変化してきたと考えるべきであろう。

マルクスの記述は、市民社会の全構成員が商品知識をもっていること、さらに商品知識をもっていなければならぬこと、しかしながら完全な商品知識をもちえなくなってしまうという現実、しかし商品知識をもっているとは仮定しなければ売買契約という対等の立場での契約を結べないこと、したがって、実際には商品知識をもっていないくても、商品知識をもっていると法的にも認めざるをえないこと、その結果、商品を購入してしまった後には、基本的にはすべての責任が購買者に転化されてしまうという社会が市民社会であるということを示している。

商品の使用価値について商品学は理論的考察を欠落させてきたのであるが、そのような商品学の理論的内容について反省し、新たな展開を求めたのは、敗戦後の品質論であった。品質論は品質形態論として発展し、価格形

態論とともに、商品形態論を構成する。品質形態論における基礎概念として、商品の使用価値は位置づけられている。使用価値概念の再検討をうけて、品質形態論・商品形態論への発展を準備することこそ本稿の延長線上にある目的である。⁽⁴⁾

本稿では「使用価値概念」という表現をとっているのであるが、マルクスの意図とは異なるものであるかもしれない。使用価値概念でもなく、使用価値論でもなく、「使用価値そのものについてのマルクスの考え方」という意味である。

(1) „Karl Marx—Friedrich Engels Werke,“ Band 13, Dietz Verlag, Berlin, 1961.

『マルクスエンゲルス全集』第一三巻、大月書店、一九六四年。

(2) „Karl Marx—Friedrich Engels Werke,“ Band 23, Dietz Verlag, Berlin, 1962.

『マルクスエンゲルス全集』第二三巻、大月書店、一九六五年。

(3) 風巻義孝『商品学の誕生——ディマシュキーからベツクマンまで』東洋経済新報社、一九七六年。

(4) 一例として、橋本仁蔵・中村巧・河野五郎・飯島義郎『品質基礎理論』税務経理協会、一九六四年をあげておく。

二 使用価値の初出——『哲学の貧困』

マルクスの使用価値概念を追跡してみると、筆者の知るかぎりでは、『哲学の貧困』（一八四七年刊）に初出する⁽¹⁾。

では、『哲学の貧困』以前には、使用価値に関連する内容についてはどのように言及されているのであろうか。

『聖家族』は一八四五年に出版され、「ブルーノ・パウワーとその伴侶を駁す」というサブ・タイトルであるが、その「第四章 認識の静止としての『批判的批判』」またはエドガー氏としての批判的批判 4 ブルードン⁽²⁾において、マルクスは「社会的効用」を使用している。

「価値は、はじめは、その物の生産費を社会的効用 (ihre gesellschaftliche Nützlichkeit) によって見たところ合理的にさだめられる。あとになって、価値は純偶然的な規定であって、生産費にたいしても、社会的効用にたいしても、いっそう比例しなくてもよいものだということがわかる。」(邦訳二九ページ)

ここでは「社会的効用」が定義されることなく使用されている。「(社会的) 効用」といっても、現在の経済学

におけるテクニカル・タームとして「限界効用」の系列にはいる「効用」とはちがい、ごく一般的な意味での「効用」であり、「役立ち」というほどの内容である。

「ほんとうのブルードンは『イリアス』の価値、経済学的な意味でのその価値 (valeur intrinsèque) を、その交換価値 (valeur échangeable) に対立させ、批判的ブルードンはその『内的価値』すなわち詩としてのその価値に、『交換用の価値』を対立させている。」

(邦訳四五ページ)

「経済学的な意味でのその価値」を「交換価値」と「対立」させているのであるから、「その価値」とは「使用価値」のことであろう。だが「使用価値」を使っていない。さらに注目すべきことは、「その価値」に附けられたフランス語 (valeur intrinsèque) である。意味は「内的価値」もしくは「内在的価値」というほどの用語であるが、『資本論』第一巻第一章にも再出する。

「交換価値は偶然的なもの、純粹に相対的なものであるように見え、したがって、商品に内的な、内在的な交換価値 (valeur intrinsèque) というものは、一つの形容矛盾であるように見える。」(邦訳四九ページ)

ジ)

ここでは交換価値として出現するのであるから、『聖家族』の用法とどのように異なるのであろうか。

『哲学の貧困』は「ブルードンの『貧困の哲学』への返答」というサブ・タイトルに示されるように、ブルードン批判を意図して出版された。

『哲学の貧困』では、最初に「第一章 一つの科学的発見 第一節 使用価値と交換価値の対立」としている。マルクス文献における使用価値の初出であるが、冒頭からブルードンの『貧困の哲学』からの引用がなされているように、内容はブルードンを材料としてそれへの批判を主として展開したものである。ブルードンが使用価値と交換価値をとりあげているので、マルクスも使用価値をとりあげざるをえないという印象が強い。したがって使用価値は引用文を含めて頻出するが、マルクス自身の使用価値概念を積極的に明示している部分はほとんどない。

ブルードンが「豊富さ」と「使用価値」、「稀少さ」と「交換価値」を「同一視」とするとマルクスは批判する。

ブルードンが「使用価値」とよぶものを、他の経済学者は「所見価値」とよぶとしてシュトルヒを例としてあげている。このようにみてみると「効用または使用価値」と表現したり、所見価値という例を出すごとく、マルクス自身の使用価値概念は明確ではないと思われる。

さらに『哲学の貧困』には、

「供給される生産物はそれ自体で効用あるものなのではない。消費者がその効用を確認するのである。そればかりか、たとえそれが効用あるものとしての資格を認められても、それはたんに、効用ある物というだけのものではない。……彼の供給するものはたんに、効用ある物であるばかりでなく、さらになによりもまず売買価値なのである。」(邦訳四一ページ)

という説明がある。ここで「効用あるもの」という表現は使用価値に関係するのであるが、「効用あるもの」という表現では、抽象化の段階が低い表現である。ここで使用価値を使っていないのは、前述したように、マルクス自身の使用価値概念が明確になっていないということの意味であろう。

(1) „Karl Marx—Friedrich Engels Werke,“ Band 4.

Dietz Verlag, Berlin, 1959.

『マルクス・エンゲルス全集』第四巻、大月書店、一九六〇年

(2) „Karl Marx—Friedrich Engels Werke,“ Band 2, Dietz Verlag, Berlin, 1957.

『マルクス・エンゲルス全集』第二巻、大月書店、一九六〇年

三 使用価値の重視——『経済学批判要綱』

一八五七年—一八五八年にかけてのノートを主内容として出版された『経済学批判要綱』は、マルクスの理論形成にあたって、重要性を認められて、『経済学批判要綱』研究も進みつつある。⁽¹⁾ 使用価値把握におけるマルクスの深化についても『経済学批判要綱』の重要性は同様に大きい。ただし、後にみるようにマルクスの記述が様々に混在し、非常に理解のしにくい表現になっている。

『経済学批判要綱』がノートであることからすればやむをえないことであり、内容の検討の以前に、記述の整理を必要とする。

『経済学批判要綱』について以下の三点に集約して整理する。

a 人間の欲望と使用価値

b 使用価値と交換価値の関係

c 使用価値の形態規定性

a 人間の欲望と使用価値

「商品の特殊な効用」(邦訳八六ページ)と表現したり、「直接にその個人のために存在している有用性、使用価値」(邦訳一九〇ページ)と記述したりしているが、前者は日常的な慣用の用法の継続使用とみられることは前述の『聖家族』と同様である。後者は有用性＝使用価値と読みとることができるが、『資本論』段階でのマルクスからみれば不十分な表現というべきである。人間の欲望についてふれ、さらに使用価値について、それぞれの重要性についての記述があるが、両者の関係について明確になっているというわけにはいかない。

「新しい欲望の生産と、新しい使用価値の発見と創造」(邦訳三三六ページ)について言及し、さらにこれを解説するようにいう。

「いろいろな物の新しい有用な特質を発見するため、に全自然を探索すること、あらゆる他所の風土と国々の生産物を全般的に交換すること、自然対象を(人工

的に)加工し、それによって、それらに新しい使用価値をあたえること。地球上のあらゆる方面を探索して、新しい有用な対象を発見するとともに、またもとの対象の新しい使用性質を発見し、また原料等としての新しい特質を発見すること。したがって自然科学をその極点まで発展させること。」(邦訳三三七ページ)さらに欲望についても

「社会自体から生まれる新しい欲望の発見、創造、充足。社会的人間のあらゆる性質の陶冶と、できるだけ豊かな欲望をもつものとしてのそうした人間の生産。」(邦訳三三七ページ)

と述べているが、むしろ、商品の有用性と欲望の関係で使用価値をみていることになる。この両者の「関係」については『資本論』を待たなければならないのである。マルクスは使用価値について

「経済的形態規定の外部にあるこの内容は、ただ次のようなものでしかありえない。——すなわち、1)交換される商品の自然的特殊性。2)交換者の特殊の自然的欲望、あるいは両者をあわせて、交換される商品の相異なる使用価値。」(邦訳一六二ページ)

と述べているが、この場合に「両者をあわせて」というその内容が問題なのであるが、『経済学批判要綱』では必ずしも明確になっていないと思われる。

b 使用価値と交換価値の関係

「商品……が交換価値によって媒介された使用価値として生産される」(邦訳一一六ページ)

「価値の最初の形態は使用価値であり、……第二の形態は使用価値とならぶ交換価値」(邦訳九七ページ)というように、使用価値に対する交換価値の関係が意識され、その関係をどのように表現するかということになる。

「経済的諸関係の発展段階が異なれば、交換価値と使用価値は異なった諸関係で規定されるということ」(邦訳五九五ページ)

交換価値と使用価値は経済的諸関係の発展段階にに応じて、異なるというものである。すでに新しい指摘というる。

c 使用価値の形態規定性

さらに、使用価値について重要なのは、使用価値の形態規定性ということである。

「そのなかに価値の実存する使用価値の、……特殊な性質がここではそれ自身形態規定的なものとして……他の資本にたいしてある資本にある特殊な属性をあたえるものとして……扱われる。」(邦訳五九五ページ)

経済学で使用価値をどのように把えるかということとはまさに「形態規定性」と関係するのであるが、そのことはリカード批判とも関連をもつ。マルクスがこの段階でリカード批判とする最大の重点は、リカードが交換価値のみを中心として論理構成をするとしながら、無意識のうちに使用価値を説明に使っているということである。このことを逆にいえば、価値論を展開する場合にも、使用価値を無視しては不可能なのであり、価値把握の内容も不十分なものになることを意味する。

「リカードはブルジョワ経済は交換価値だけを問題としていたのであって、使用価値とはたんに外面的に関係をもつだけであると信じているが、交換価値のもっとも重要な諸規定をはかなぬ使用価値から、交換価値にたいする関係からとりだしている。」(邦訳五九五ページ)

同様のリカード批判の場所でもあきらかである。

「もしそのものとしての交換価値だけが経済学で役割を演ずるとすれば、たとえば原料等としての資本のばあいのように、純粹に使用価値だけに関連するような要素が、どのようにしてあとからはいりこむことができたか、どのようにして、リカードのばあいのように土地の自然的性質が突如としてもちこまれるのか？」(邦訳一八九ページ)

「使用価値そのものが、経済的形態自体を規定するものとして、形態自体のなかにはいりこまないであろうか、たとえば資本と労働の関係で？」(邦訳一八九ページ)

使用価値の重要性を強調して、マルクスは労働や資本は使用価値を含む形で理解しなければ、その内容的把握が深まらないことに気づいている。

以上三点にしばって『経済学批判要綱』を整理した。

(1) Karl Marx, „Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie“, Dietz, Verlag, Berlin, 1953. (マルクス『経済学批判要綱』I—V、大月書店、一九五八年—一九六五年。)

四 商品の二重性と商品の二要因

——『経済学批判』と『資本論』

本節については、以下のような内容で整理を試みる。

- a 使用価値とはなにか
- b 社会的使用価値
- c 商品の二要因

本稿の一応の総括として、使用価値に言及する。

a 使用価値とはなにか

『経済学批判』には、使用価値についての説明はない。

「いままで商品は、二重の観点で、使用価値として、交換価値として、いつでも一面的に考察された。けれども商品は、商品としては直接に使用価値と交換価値との統一である。」(邦訳二六ページ)

という。この場合、「使用価値と交換価値との統一」とは、二重の性質をもっていることを意味している。

「諸商品の現実の交換、すなわち社会的な物質代謝は、使用価値および交換価値としての商品の二重の性質が自分を展開し、しかも商品そのものの形態転換が同時に貨幣の一定の諸形態に結晶するような形態転換

のかたちでおこなわれる。」(邦訳六九ページ)

この個所は貨幣についての説明であるが、使用価値と交換価値として商品を把握していることが明快に表現されていると思われる。

『資本論』において

「ある一つの物の有用性は、その物を使用価値にする。」(邦訳四八ページ)

という表現で、マルクスは物と有用性と使用価値の関係をあきらかにした。使用価値は具体的には「ある物」として存在し、現象的には「有用性」として人間に対するのであるが、それらを包含して使用価値という抽象的な概念でよぶのである。

使用価値と表現されている個所を有用性と読みかえたり、物と読みかえたりしたほうがわかりやすい場合が出てくるのである。物と有用性は概念として把握されているのではないから、論理構成に関する部分では概念として使うわけにはいかないのである。使用価値は価値概念であって、人間が使用の際にある物に発見する価値なのである。抽象的な価値概念であることは、使用価値の実現がある物の使用または消費においてはじめて実現さ

れるというところにもうかがえるのである。

物でもなく、有用性でもないことは、使用価値の実現が、物の実現や有用性の実現ではないことを示している。抽象的概念ということについては、商品についても同様である。商品は存在としては具体的な物として存在しているが、論理展開における商品という概念は抽象的である。これが使用価値についての一応の結論である。

『資本論』冒頭の商品に関する記述は、まず物、つぎに使用価値、さらに交換価値という順序をとっている。

すくなくとも物——使用価値の部分のところまでは商品に限定されているわけではなく、商品の前提の説明である。このことは従来、マルクスの「商品の分析をもって始まる」という記述に影響されて、見逃されてきたように思われる。第二パラグラフは物と欲望の説明であり、第三パラグラフは有用物の説明である。第四パラグラフにおいて、はじめて使用価値の説明が出てきて、その最後の部分で使用価値の二重性——社会的形態にかかわらない「富の質料的内容をなす」性格と、『資本論』において考察対象とされる社会である「資本制社会」における交換価値の担い手としての性格——を指摘する。第五

パラグラフにおいて交換価値をとりあげ、価値を導き出す準備をするのである。

b 社会的使用価値

「社会的使用価値」という用語については『経済学批判要綱』においても『『経済学批判』の原初稿の断片』で

「イギリスの借地農は、まったく彼の生産物の販売に、すなわち商品としての販売に、したがって彼の生産物の社会的使用価値に依存している。」(邦訳一〇二六ページ)

という表現で使われているが、後の『資本論』における「社会的使用価値」とは異なり後の展開に生かされていず、『経済学批判』においても使用されていない。「他人のための使用価値」については早くから意識されているが、「社会的使用価値」が使用価値の形態規定とともに問題とされてくるのは『資本論』が最初であり、経済学として対象とされる使用価値は社会的使用価値であることが明らかにされる。商品も社会的使用価値の一部である。

c 商品の二要因

使用価値と交換価値を商品の二重性にとらえる『経済学批判』と使用価値を商品の二要因にとらえる『資本論』とはどのようなちがひがあるだろうか。

商品の二重性は「使用価値であると同時に交換価値である」と表現され、商品の二要因は「商品は使用価値と価値をもつ」と表現されている。「二重性」についてはアリストテレスも気づいていたことは『資本論』における引用にも示されている。

物——使用価値の論理の延長において、「使用価値が商品に転化する」という場合には、使用価値そのものが商品である。さらに使用価値が交換価値の担い手である場合は商品の二重性ということになる。『経済学批判』においては、商品の二重性にとどまっていたが、マルクスは二重性を追求していきながら、使用価値と交換価値の対立ということにたどりついた。

使用価値と交換価値の対立は『剰余価値学説史』に初出する⁽¹⁾。

「商品は使用価値と交換価値との対立を含んでいる。この対立はさらに発展して、商品の商品と貨幣への二重化として表わされ実現される。」(邦訳Ⅲ一〇九ページ)

ジ)

この場合の対立は商品と貨幣への二重化であって、商品の二要因としての発展の契機としての把握ではない。

「商品のうちに包みこまれている使用価値と価値との内的対立は、一の外的対立によって……表示される。」

「使用価値と価値との内的対立」という表現は商品の二要因を意味しているのであり貨幣・資本へと発展していく契機を意味するものである。それを『資本論』二版以降「第一篇第一章商品 第一節 商品の二要因——使用価値と価値(価値実体 価値量)」として、第一節の表題に表示して、商品の二要因という把握は完成する。

使用価値にしぼってみると、前述の「使用価値である」と「使用価値をもつ」という表現は大きな意味がある。商品の二要因としてはじめて、「使用価値をもつ」と表現できるのであって、この表現は商品の二要因以前にもないわけではないが、その場合は使用価値を有用性と読みかえられるのである⁽²⁾。

(1) „Karl Marx—Friedrich Engels Werke,“ Band 26 I

—III, Dietz Verlag, Berlin, 1965—68.

『マルクスエンゲルス全集』第二六巻Ⅰ—Ⅲ、大月書店、一九六九年—七〇年

(2) この点かつての筆者の使用価値把握は一面的であった。石崎悦史「商品研究の展望——商品形態論序説」『商品研究』二五—三・四所収、一九七五年。

五 使用価値の強調——「ヴァーグナー傍注」と残された課題

マルクスはヴァーグナーについて『使用価値』は『科学から』まったく『遠ざけ』られるべきであるとする人々の仲間に私を入れている」(邦訳三六九ページ)と述べ、自らそうでないことを論証するのである。⁽¹⁾

「現物形態では使用物、別な言い方では使用価値であり、他方では交換価値の担い手であり、この観点からはそれ自身『交換価値』であることを発見する。」

(邦訳三六九ページ)

と『資本論』の論理を要約する。さらに、「労働生産物の具体的な社会的姿態である『商品』が、一方では使用価値であり、他方では『価値』——交換価値ではなくて——なのである。」(邦訳三六九ページ)

と使用価値と価値との関係を整理する。

ここで社会的使用価値についてマルクスの説明が初出する。『資本論』第一章にある社会的使用価値を引用した後、ロードベルトスの「社会的使用価値」に言及し、ロードベルトスとの意味の差を強調する。

「それとともに使用価値——『商品』の使用価値としての——は、それ自体歴史的に特殊な性格をもつ。」

(邦訳三七〇ページ)

マルクスは使用価値の重視について、例示を加えながら、

「それゆえ私にあっては使用価値はいままでの経済学におけるのとはまったく違った仕方で重要な役割を演じていること、……使用価値が考察されるのは、その考察が……あたえられた経済的形象の分析から生まれてくる場合に限られているということ、以上である。」(邦訳三七一ページ)

これまでマルクスの使用価値の考え方について追跡してきた。いまだ不十分であることを確認しつつ、一つの結論を提示しておきたい。『哲学の貧困』以来、使用価値

値という用語が使われているが、その内容が豊かになってきたということがあきらかにされた。その結果は『資本論』に「商品の二要因」として集約されているとみることができるが、八〇年代の「ヴァーグナー傍注」において、さらに新しい展開を予感させている。

使用価値概念の内容における深化を整理してみると

- (1) 『哲学の貧困』に使用価値が初出しているが、日常的な用法での効用と区別されず、概念として成立していない段階

- (2) 『経済学批判要綱』以後における使用価値追及の段階

- (3) 『経済学批判』段階での商品の二重性把握と『資本論』第二版における商品の二要因把握としての使用価値の一応の完成

このようにみえてくると、使用価値概念の深化は価値論の深化と一致する。価値論が明確になることによって、使用価値論も明確になってきている。『資本論』の記述の中心は使用価値が捨象されている（この把握は誤りであるが）といわれることが示すように、価値論の把握が中心であることは否定できない事実である。使用価値概

念の把握が不十分であることも事実であり、「ヴァーグナー傍注」はもう一度使用価値概念の重要性を強調している」と読みとれる。

使用価値論といっても、独立した使用価値論があるわけではなく、価値論との関係を常に意識しておかなければならない。マルクスの使用価値概念の変遷においては、『経済学批判要綱』がこの場合も鍵となり、その中でも「1) 価値」（邦訳八五三ページ）と題する「未完の書き出し」を重視すべきであろう。

最後に本稿において残された課題を整理しておく。

- (1) 物・有用性・欲望と使用価値の関係という基礎的構造をあきらかにすること

本稿においてはマルクスの各著作について、マルクスの論理に内在しながらの追跡・検討は不可能であった。特に欲望の問題を考えるうえで『経済学哲学草稿』、使用価値概念の生成について『経済学批判要綱』、サービスの使用価値について『剰余価値学説史』の検討が不可欠である。『経済学批判』、『資本論』においては、使用対象・有用物などという用語が注意深く使い分けられていることに注目し、

(2) これらの用語の差についても検討を必要とする。

マルクスが経済学史で占めた位置を使用価値論史においても検討すること

マルクスはリカード批判を経過することによって、価値論を進化させると同時に、使用価値論においても独自の展開が可能となった。

しかるに、メンガーの『国民経済学原理』が一八七一年に出版されている。メンガーは限界効用学派の創始者として、ジェボンズ・ワルラスと共に有名であることは周知の事実である。そのため、メンガーも使用価値概念とは正反対の理論として、学史的に位置づけられている。メンガーの理論の内容は決してそのように簡単に割り切れない。メンガーは限界効用学派の創造者のうち、唯一のドイツ語圏の学者として、非常に強く使用価値を意識している。マルクスのごとく、メンガーも先行著作を広く参照し、各説を引用・吟味したうえで、『国民経済学原理』の「第六章 使用価値と交換価値」を独立の章として書いているのである。

メンガーが使用価値概念を検討しながらそれを不

充分とする根拠と、メンガーが「効用」へと移行してゆく論理を検討する必要がある。メンガーの使用価値把握とマルクスの使用価値把握との最大の相違点はメンガーが使用価値を有用性とイコールとしたところにあると思われるが、比較検討を必要とする。このような作業をつうじて、現代における使用価値概念が再生しうると思われる。

(3) 商品学として品質形態論への論理的展開に使用価値把握を生かすこと

使用価値概念の研究はその成果をどのように生かしていくかというところに最後の目的はある。商品学においては、品質的形態論であるが、生産力論・分業論・技術論に密接な関連を持つこともここで指摘しておかなければならない。

マルクスは『資本論』第一巻「第八章 労働日」においてパン製造の粗悪品の例をとりあげているが、日本における現状をみても、敗戦後の使用価値の危機的状況から脱出はしたが、現在の食料加工品にみられるように、化学肥料・防腐剤・殺虫剤・消毒薬などの残留分への警鐘が小さいながらも発せられている。商品として食料が

生産されることによって、食料消費は全て使用価値に問題のある状況に追いこまれている。人類存続の問題として使用価値が重視されなければならない時代が目前に迫っているといえないであろうか。

使用価値を重視することによって、混沌にある商学の再建への方向を見出す手がかりとしたい。その一環に商品学も位置づけられるものとなろう。

本稿は先学の示唆に多くを負うものであるが、さしあ

たりマルクス自身の言葉によって使用価値概念を追跡することを試みたものである。

(1) „Karl Marx—Friedrich Engels Werke,“ Band 19, Dietz Verlag, Berlin, 1962.

『マルクスエンゲルス全集』第一九巻、大月書店、一九六八年)

(関東学院大学助教授)